



# パラダイス・イデオロギー

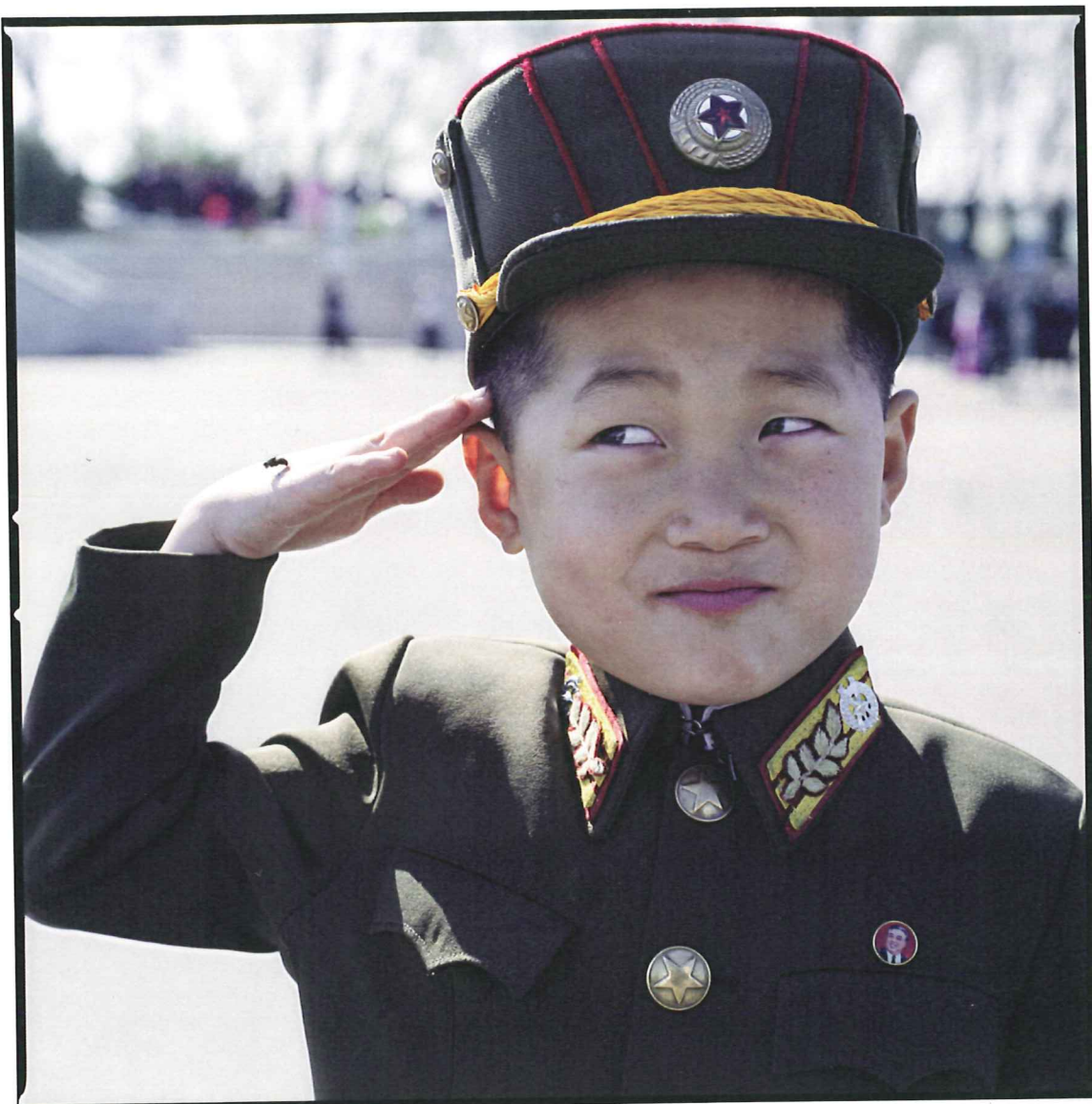


写真 渡邊博史

— そもそもなぜ北朝鮮へ行ってみようと…  
 渡邊 アメ리카から日本に戻ってテレビを観ていると、北朝鮮の報道がとても多くて、その取り上げ方も僕にはちょっとスキヤンダラスな取り上げ方をしているように感じています。もちろん拉致の問題があるからある意味、当然なのかもしれませんが、それでもニュースとしてはややヒステリック過ぎる気がしたんです。

北朝鮮自体に対する僕のイメージは、共産主義という名の独裁政治が行われている国というもので、多くの日本人とそれほど変わるものではないんですけど、でも、どんな国でもそうだと思うんですけど、どんなにネガティブのところがあったとしても、それだけであるとか、それがすべてということはないと、得ないと思うんですね。だから、この国はこうだという決め付けることに僕は疑問があったんです。そんな時、テレビで拉致された連池さん一家が海水浴する家族写真というのが紹介され、彼らの後ろに写っているのが横田めぐみさんだという説明に出くわしたんです。その時、僕は、まず「海水浴」という言葉にちょっと驚いたんです。へえっ、海水浴に行けるような生活をしたのって思ったわけですね。それまでは、僕は彼らは独裁政治のために人里離れた半獄のようなところで半強制的な生活を強いられ、スパイ教育みたいなことばかりされて人間らしい生活はしていないかと思っていたものだから、そのイメージと「海水浴」という言葉のイメージとがすごくかけ離れていたのが驚いたんです。それと、その写真そのものが部分拡大されていて、これが横田めぐみさんですよと言われても、僕にはその写真からはめぐみさんとは確認できないわけですね。誰が見たって分からないと思えました。人間って、よく見えないものを見せられると、ますます見なくなるものじゃないですか、それで触発されて、やっぱり北朝鮮に行ってみようかなと思ったのが発端です。

それから僕の友人にマーク・エドワード・ハリスという写真家がいる、彼は既に北朝鮮へ行き、写真を撮り、写真集も出しているん

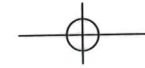
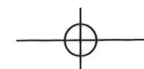
ですが、その彼の家でパーティーがあったときに写真を見せてもらったんです。彼の写真は、小さなカメラでスナップショット風に撮ったものなんです。背景に映っている人や風景にとっても興味をそそられたんです。それ以来、北朝鮮に行きたくなって調べ始めたんです。

— それにしても北朝鮮へ行くのは簡単ではなかったんじゃないですか、どのように実現されたんですか？

渡邊 日本の旅行代理店が北朝鮮ツアーを募集しているのを知って、そこに申し込んだんです。そこで、僕は写真家として写真を撮りに行くつもりだから、ツアーとしては行きたくない、あくまでも個人旅行として写真を撮ることを前提に行きたいと頼んでいたから、しばらくして代理店からビザが取れましたと連絡があつて出かけることになったんです。

— ええっ、日本の旅行代理店ですか。北朝鮮に関する日本のテレビ報道は、いったい誰が、いつ撮ったのかもわからないような同じ写真や映像を繰り返し使うものだから、それ自体によって偏ったイメージを持たされてしまつて、一人の人があんなに写真を撮るようになって出来ないものと思込まれてしまつていましたよ。写真撮影はおろか、そもそも日本からは行けないものと思込んでしまいましたね。そんなに簡単に行けるものなんですか？

渡邊 結論から言うと、簡単に行けませんね。旅行代理店は一生懸命ツアーを組もうとしていますから。ただ、実際に行こうとする日本人があまりいないだけなんです。北朝鮮に行ってみると、外国人も結構たくさん来てるんです。私が滞在している間に出会った日本人は一人だけでしたが、その人は中国でビジネスをしている人で、北朝鮮にゴルフを来たのか」と聞いてみたら、「世界はあちこち行つたから、あとは北朝鮮しかなくて……」みたいなことを言っていました。実際、北朝鮮にはそういう観光客が多かったです。概して旅行好きな人が多くて、「最後の秘境」みたいな





週刊金曜日 2008.11.7 (726号)



週刊金曜日 2008.11.7 (726号)

待をもって来てみたという人が多いようでした。もちろん、制限付の観光ですけれど、すくなくとも行こうと思えば行けないことはないと思います。

——それでもいざ現地で撮影となるといろいろと制約があるわけでしょうか？

渡邊 もちろんあります。ありますけれど、少なくとも僕の場合は初めから写真家として入国していますから、撮ること自体に特別の問題はありませんでした。先に紹介した写真家もそうですけど、多くの人が写真は撮れないと思込んでいるから写真家であることを告げずに入国している場合が多いようなんです。僕は写真家として入国しているから、写真を撮ることが当然ということになりますね。とはいえ、僕一人に対して運転手が一人、ガイドが二人つくわけです。ガイドには、何を撮りたいのかと聞かれました。それで僕の写真集を見せ、僕は各国の歴史や文化に興味があるから、この国の文化を見たいし、撮りたいから、そういうものが見れる場所へ連れて行って欲しいと言いました。そしてイギリスのガイドブックに出ていた病院とかにも連れて行ってくれと頼みました。普通、そんなところへ行く人はあまりいないでしょうけど、情報誌に載っているくらいだから行けない所もないだろうと思ひ頼みました。最初は、決められた観光コースを行うこととするのですが、その場で直ぐにはいけなくても翌日に連れて行ってもらい、撮影もさせてもらいましたよ。

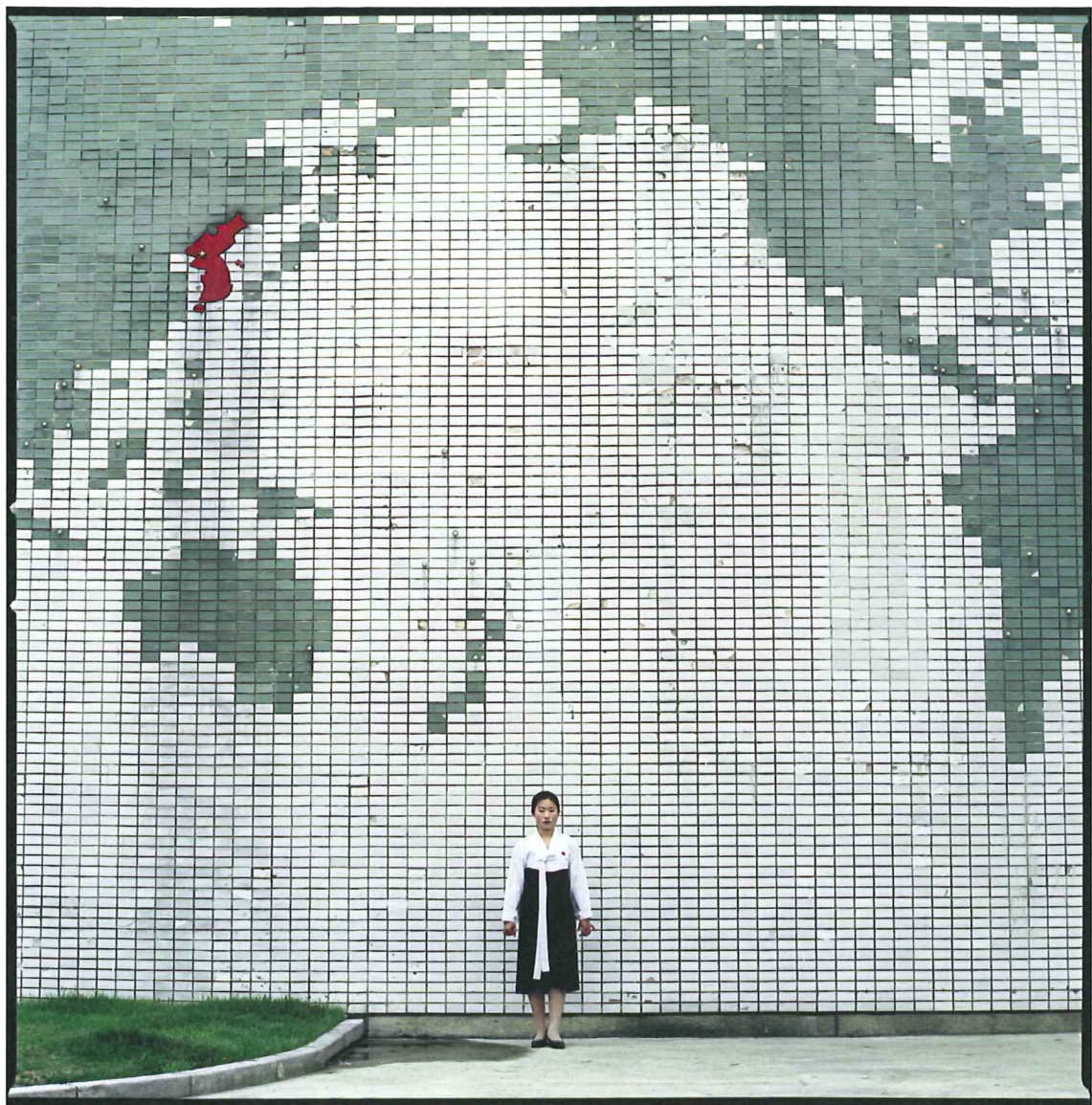
——それでもアメリカや日本で写真を撮るようなわけにはいかないでしょうか？

渡邊 それはそうですね。僕にとっては、写真を撮るときに常に他人が僕の傍にいてというところに違和感を感じました。それはどうしようもないことでした。だから、変な言い方になりますけど、それに負けてしまっていたら写真は撮れなかつたでしょうね。だから僕は、何処へ行ってもパシャパシャ撮っていました。でも、意外にそれは撮るな、これはダメと止められたりすることはほとんどありませんでした。ただ、一人でホテルを出て好きに行きたいところへ行つて撮ることはできませんでした。その意味では制限されているわけだし、コントロールされての撮影だったというべきでしょうね。

——予め決められたコース以外の路地を入った裏街とかを、多少の危険を犯しても撮っておきたいという衝動みたいなものに襲われたことはありませんでしたか？

渡邊 多分僕だけではなく、北朝鮮に行ったことのある人なら誰でもそう思うんじゃないかと思いますが、街そのものは意外と普通なんです。もちろん、ちらちらとは汚い場所や貧困を感じさせる風景も見えましたけれど、僕自身が北朝鮮の悲惨なところを撮りたいとか、暴露したいとか考えていたわけではなく、暴露したいとか危険を犯してまであえてそういうネガティブな所を撮りたいとは思いませんでした。ただ、写真というのは、人でも風景でも、とくに意識しなくてもその人の背景、生活や社会の現実を写し撮ってしまうことがあるんですね。僕はそのようなものとしてしみ出て来る写真に惹かれるんです。これは汚い現実です。よって写真で提示することもあり得ると思えますけど、そのような想定のもとに撮られた写真じゃなくても、美しく撮られた写真の表情のどこかに滲みだした悲しさや寂しさとか、ある被写体の背景に何気なく映っている風景に現れた現実とか、そんなものを発見することも写真の一つの魅力だと思えます。ちょっと大げさな言い方になるかもしれませんが、そこに写真の醍醐味があると思えます。要するに僕は自分の答えを表現するものとしては写真を撮ることを「なぜ？」とか、「おや？」とか「クスチヨンマークがないと僕は写真を撮れないんです。まず誘発されるものがあつてこそ、写真は力を持つてくると僕は思っているんです。

——いま日本で見ることの出来る北朝鮮の写真は、当局が提供したいわけば公式の写真か、決死の覚悟で隠し撮りされた特殊な写真しか見れないような状況ですから、今回の渡邊さんの北朝鮮の「普通」(変な言い方になります)の写真には逆にとて新鮮なものを感じます。先日のニコサンロンでの写真展



渡邊博史 (わたなべ ひろし)  
 北海道札幌出身。1975年日本大学芸術学部を卒業後、アメリカ、ロサンゼルスに移住、テレビコマーシャル制作の仕事につく。1993年UCLA (カリフォルニア州立大学) でMBA修士号を修得。1995年ごろから個人的な作品として写真を撮り始める。2001年よりファインアート写真家として活動を始め、以来主にアメリカで多数の個展を行うと同時に世界の多くの写真雑誌で作品を発表する。作品はフィラデルフィア美術館、ヒューストン美術館、ジョージ・イーストマン・ハウス、サンタバーバラ美術館などでコレクションされている。2006年 Photolucida (アメリカ) から、Critical Mass Book Awardを受賞。2007年「私は毎日、天使を見ている」で、さかみはら写真賞を受ける。2008年 2008年「Ideology in Paradise」の仕事に対し、アメリカのCenterからプロジェクト・コンペティション・ファースト・プライズを受ける。写真集「私は毎日、天使を見ている」I See Angels Every Day 窓社「パラダイス・イデオロギー」2008年11月下旬、窓社より刊行予定 写真集「Findings」Photolucida (アメリカ) 刊

構成／東川光二

し、国内でも転居や移動の自由もないわけですから凄く不自由なんですけど、外国の人々が北朝鮮に行くのはそれほど難しいことではないということなんです。実際、北朝鮮へ行っちゃいけないと言ってるのは日本の方なんです。成田空港には「北朝鮮には行かないように」という意味の張り紙が入りまじっています。だから、多くの日本人は北朝鮮が入国を拒んでいるから行けないと思ってるようですが、渡航を禁止しているのは日本だということなんです。むしろ北朝鮮は外貨稼ぎのためにも来て貰いたいと思ってるわけです。もちろん、彼らだって自分達の体制に不利なことや不都合なことは認めないだろうし、政治的な制限もするでしょうけれど、基本的には外国人に来てもらうことを望んでいると思います。——とにかく日本人の北朝鮮にたいする一辺倒のイメージを危惧するとともに、国家的イメージだけで北朝鮮を捉えず、普通の人々の現実を知る回路をもっと沢山作っていく必要があると思います。今回の写真集でその回路が広がることを期待しています。

週刊金曜日 2008.11.7 (726号)

に来場された若い女性が「いままで自分が知っていた北朝鮮とは違っていた」と感想を述べていましたが、それが正直なところで、今回の写真はそんなところから素直に見て欲しいと思います。とくに渡邊さんの撮られるポートレートには、前作のエクアドルの精神病棟で撮られた写真集(「私は毎日、天使を見ている」窓社刊)でも感じたことですが、被写体に対して真正面から向き合われるから、そこにおのずとある種の緊張感や距離感が生まれ、写真家と被写体の間にそれを越えようとする意志が互いに生まれ、絶妙の美しさが生まれ、被写体の内面が滲み出て来ることになりました。今回の北朝鮮のポートレートにも、そのような緊張感や距離感をうかがわせながらも、さらにある種の虚構性、虚偽性を感じてしまうわけなんです。しかし、その虚構性・虚偽性そのものこそ、今日の北朝鮮の現実であり、事実であるということに理解すべきだと思います。そのうえで、お聞きしたいのですが、撮影をさせている被写体が見せる表情に素顔とは違う二面性みたいなものを感じることはありませんでしたか？

渡邊 それはありましたね。写真を撮ろうとするときは、やはり子どもたちもそれなりの表情をしますし、それはあるいは国家が求めているものかもしれません。しかし僕は、そのなかにもなにかしら素のものが出ているのではないかと思ったりしました。そこに危うさがあると思います。というのは、撮影が終って帰ろうとするときに振り返ってみると、やはりさっきの表情とは違うものではないから、それは決して明るいものではないからなんです。

——もう一度北朝鮮に行ってみようと思っておられますか？

渡邊 ええ、もう一度行ってみようとは思っていません。ただ、同じ方法で撮ることはないだろうと思えますけど。でも、僕もいろいろな国を旅してきましたが、今でも写真を撮る上で北朝鮮という国はかなり魅力的なところだと思えますね。

今回の旅で気が付いたことがあるんですが、確かに北朝鮮の人々は海外に出る自由はない

週刊金曜日 2008.11.7 (726号)

